小説 筆祭競介

挿絵 あいざわひろし

立ち読み版

登場人物紹介
Characters

アタシはね。芸能界で天下を取るつもりなの。

獅子堂璃乃（ししどうりの）
（芸名：小春風（こはるかぜ）りの）

高階家におしかけてきたアイドル。本当は強気でツンな性格なのに、事務所に清純派のキャラを押しつけられているため、逃げてきた。

実は……れれれ恋愛小説家になるのが夢なんです。
綾文美紗緒（あやふみ みさお）
（芸名：REonA（レオナ））
璃乃といっしょにおしかけてきたアイドル。事務所に借金があるためにグラビアアイドルをやっているが、小説家を夢見ている。
高階慎一（たかしなしんいち）
バイトをしながら一人暮らしをする青年。璃乃と美紗緒の事情を聞き、二人のアイドルをかくまうことに。

序　章　扉を開けばダブルアイドル!?　007
第一章　ホントはツンな清純派アイドル　017
第二章　実は文学少女なグラビアアイドル　046
第三章　脱いだらアタシも凄いんだからね！　077
第四章　取り柄はエッチな水着姿だけ　103
第五章　アンタのことなんて大っ嫌い！　138
第六章　おしかけアイドル、最後の日　170
第七章　二人の夢　212
終　章　扉を開けば、再び……？　252

第四章　取り柄はエッチな水着姿だけ

自分の腹の下でグラマーな女体を反らせたまま、ビクビクと全身を震わせている美紗緒に思わず問いかけてしまう。

「……だ……いっ……じょうぶ……です」

一つ年上のお姉さんは、激しい震え声で途切れ途切れにそう口にした。

（とても大丈夫ってカンジじゃないな……）

それは慎一も同様だ。肉先で感じる愛液まみれの細やかなうねりや、竿肌をきつく締めつけてくる膣襞たちのあまりの心地よさに、頬が小刻みにプルプルと震えている。

このまま腰を肉欲の赴くまま突きまくりたい――その欲望を、美紗緒に対する気持ちでなんとか抑えつけた。

「……美紗緒さん。チューしよう」

「は、はい……――んんっ」

慎一は下半身で繋がったまま上半身を傾けて、彼女と再び唇を重ねる。

たとえセックス中でも、やはりキスは気持ちいい。その快感は色褪せるどころか、ますます深く感じられた。

「んちゅん――んんっ……し、しんいちさぁん――んんっ、ンっ、んちゅンんん……」

美紗緒もキスなら痛みを感じないためか、両手をこちらの背中に回し、自ら顔の角度を斜めにして積極的に唇の密着度を増してくる。

（……し、舌……入れてもいいかな？）

ファーストキスを先ほど経験したばかりで、それ以上に激しいキスはしたことがない。

しかしセックスまでして、ディープキスがまだというのもおかしな話だ。

慎一はきつく唇を重ねあわせたまま、慎重に味覚器官を相手の口内に入れてみた。

直後――ビクン、と女体がはっきり震える。

しかし嫌がる素振りは全く見せない。それどころか、おずおずと美紗緒までもがこちらの舌に自分の舌を合わせてきた。

ゾクゾクゾクゾクっ！

唾液に濡れる味覚器官を互いに絡めあわせたその瞬間、ただのキスとは比較にならない快感が脳天まで突き抜ける。

（なにこれ!?　メチャクチャ気持ちいい！）

想像以上の肉悦に、相手の舌を求めて舌が勝手に躍り出す。

――ヌるるンっ、ヌルるるンっムチュぬちゅくちゅちゅルル。

己の唾液を相手の味覚器官に味わわせるように、二枚の肉片が絡みあう。激しく蠢く舌によって男女の唾液は混じりあい、まるでよく練った水飴のように白く泡立っていく。

「んんっ……ンっ――んッ、んんんっ……」

それをさらに二人でねぶり捏ね回し、新たに湧き出る唾液へ溶かし続ける。

甘く漏れる美紗緒の吐息からは、痛みに耐えるような響きが消えていた。
挿入直後はまるで異物に抵抗するようだった膣襞たちのキツすぎる締めつけも、多少は緩和してきている。一番奥まで埋め込んだ肉先では、熱い蜜液がそこからトプトプと溢れ出ていることも感知していた。
（も、もう大丈夫そうだな……）
ぬるりと舌を引き抜く。と、こちら以上にディープキスに熱中していた桃色舌が、遠ざかる肉片を求めて名残惜しそうに宙を舐めた。
（うわぁ……エ、エロぉ……）
なにしろ今の美紗緒は豹耳カチューシャに首輪付き。
エッチなペットがご主人さまを誘惑するため、舌舐めずりをしたような表情だ。
「や、やだ……」
それにポカンと魅入ったこちらの顔を見て、自分が晒した顔の卑猥さに気付いた年上お姉さんが、直後に頬を真っ赤にする。
（……しかも、たまらなくカワイイ）
これほど妖艶なルックスと、グラマラスな肉食ボディをしている癖に、中身は性にウブで恥ずかしがり屋なのだからたまらない。
その激しすぎるギャップに、今にも我を忘れそうだ。

「う、動きますよ！」

結合してからずっと我慢していた腰の動きを、それでも慎重に、そしてゆっくりと開始する。ガッチリと噛みあっていた膣襞たちを、一杯に開いた肉傘が磨り潰すようにヌずるるっと擦っていく。

（やっぱまだスゲーキツキツなままだ……。でも）

痛みやひっかかりはまるで感じない。

こちらの太腿まで濡れるほど愛液を分泌し、破瓜の力みも消えている。

「はああんっ……凄く、奥まで……慎一さんが届いてますぅ――ああンっ！」

背中を掴む指先や漏れる声に悩ましさは籠もったが、痛みに耐えるような色は窺えない。

（よし。もう遠慮なく動いても大丈――ぶっ！）

慎一の意識をいきなり釘付けにしたのは、僅かなこちらのピストン運動に合わせて、重たげにタプンタプンと揺れる二つの特大バスト。

なにしろ自分はおっぱい好き。しかもデカければデカいほどいいというタイプである。

そんな男が初体験で、いきなりこのダイナミックタップンを見せられてしまっては――興奮するなという方が無理な相談だった。

「ああン！　そんな、い、いきなり――ああン！　は激しっ、すぎっんはあぁぁぁぁ！」

腰が勝手に加速していく。ペニスが女体を深く貫き、激しくえぐっていく。

蜜液まみれでトロトロの肉路を亀頭が何度も掻き分け、襞の深い蜜壺が自分の竿肌にしっくりと馴染んでいく。男根を根元まで埋めるたびに黒く縮れた己の陰毛が、美紗緒のフワフワとした栗毛ヘアと絡みあう。

「んはあぁッ！　お腹の中が内側から捲れかえるみたいで……くふぁ、慎一さんので奥をズンってされると――っはぁ！　ま、まるで喉まで届いてるみたいですぅ！」

一つ年上のお姉さんが荒い喘ぎ声混じりに、自分の背中にしがみついてくる。

プルンと厚みのあるセクシーリップを半開きにしてハアハアと息を乱しながら、官能に潤みきった上目遣いでジッとこちらを見上げてくる。

「い、いまの美紗緒さん……チョー可愛い」

たまらずキスをした。美紗緒の身体に覆いかぶさり、再びお互いの舌が溶けあうような貪婪（どんらん）なディープキスに没頭する。

「んんっ……しんいちさぁ――んくふぅぅっん！　っふぁ……んちゅっ――んんンっ！」

腰は長いストロークで楕円を描き、ズンッズンッと力強く奥を突いていく。

（美紗緒さんの中、奥までトロトロのヌルヌルでチョー気持ちいい！）

剥き出しの性粘膜を直接交わりあわせる快感に、意識が蕩けていくようだ。

肉先が最深部に当たるたび、貪るように舌を絡めあう口内で相手が「ンふっ、ンふっ」と鋭く喘ぐ。グラマーな女体全体がビクンビクンと小刻みに震え、ペニスに馴染みはじめ

た膣襞たちが淫らに激しくくねり出す。
（すげー感じてる……。奥から熱いのがトプトプ溢れてきてたまんねえ！）
女の漏らす甘い吐息とは対照的に、興奮を深める男は「ンフっー、ンフっー」と下品なほど荒い鼻息を吹き出しながら全身を躍動させていた。
ゆっくりした楕円運動だった腰つきが、いつの間にか小刻みで短いストロークの前後運動へと変化している。
（美紗緒さん！　美紗緒さん！　みさおさあぁぁぁん！）
それでいて、彼女の最深部をズンと突く時の力強さは変わらない。
一つ年上のお姉さんに対する憧れと、ＲＥｏｎＡという極上の牝肉に対する劣情――。
そんな溜まりに溜まった憧憬と獣欲を、まるで彼女の中に刻みつけるようにガシガシとペニスを突いていく。
「んんっ～～！　ッッッ！　ンっ！　んんっンんッッ！」
それに合わせてＭ字に開かれた女豹の両足が淫らに宙を掻き、舌を絡めあう口内で、彼女のどもった喘ぎ声が大きくなっていく。
（うわぁぁ！　もう美紗緒さんが感じすぎて、舌までビクビクしはじめたぁ！）
夢中で慎一にしがみつき、背中に爪を立てるように力を込めてくる。
セクシーグラビアアイドルの、あまりに官能的なその反応に男は興奮を極め、一際その

獣欲を爆発させてズンと力一杯最深部を突き上げた。
「んっ～～！　ッッッ――ンはあぁあぁっ！」
そんな渾身の一撃に耐えきれず、美紗緒がとうとう顎を反らして絶叫する。
ビクンっビクンっと全身を再び弓なりに反らせ、特大バストが官能の汗を撒き散らしながら大きく弾む――そのエロティックすぎる光景に、男の理性も吹き飛んだ。
「ああっ！　美紗緒さん！　美紗緒さあぁあぁぁん！」
覆いかぶせていた上半身をガバッと起こす。両手で彼女の太腿を抱えるようにしっかりと掴み、捕らえた女豹を絶対に逃さないようにして――ズンズンズンズズズン！
全身を波立たせるような、ガムシャラな突入を開始する。
それでいて男の視線は目の前で弾む特大バストに釘付けだ。
胸全体が官能の汗で濡れ光り、生クリーム製プリンのように濃密だった白肌が、今ではストロベリーを混ぜたようなピンク色に染め上がっている。
そして――だぷだぷだぷだぷだぷ――っるン！
あまりに激しい突入に、捲ったままにしていた豹柄ブラがツルンと再び元に戻った。
セクシーグラビア撮影用の水着でもブラはブラ。
形を維持しようとする最低限の機能は持っていたようだ。
（うわああっ、ＲＥｏｎＡだ！　俺今ＲＥｏｎＡとエッチしてるうぅぅっ！）

しかし豹耳カチューシャに首輪まで嵌めた完全なＲＥｏｎＡスタイルなのに、パンティだけ穿いていない。栗毛ヘアに彩られ、ざっくりと割れた牝裂だけが剥き出しで、それを自分のペニスが深く貫いている――たまらないシチュエーションだった。

自分の動きに合わせて、牡の征服欲を刺激せずにはいられない赤い首輪が揺れる。

数えきれないほど夜のオカズにした豹柄巨乳がリアルに弾む。

しかもそれは、先ほどまでの柔肉の赴くままの自由な弾み方ではない。小さいとはいえブラに収まったことにより、深い胸の谷間を維持したままの窮屈そうな上下運動。

本来もっと大きく弾むところを途中で戻ってくるために、パツンパツンと小気味よい効果音が聞こえてきそうな、それは淫らな動きだった。

「んはあぁぁっ！　いいっ！　慎一さんのがすごくイイぃっっ！　奥までっ、届いてああぁんっ！　気持ちいいいぃいぃっ！　ああっ慎一さん！　慎一さあぁぁぁぁん！」

そしてとうとう美紗緒が、子宮から直接絞り出すような官能の絶叫を迸らせる。

あのお淑やかで清楚な美紗緒を、女豹のＲＥｏｎＡに変えたのはこの自分。

そう実感した直後、全身で昂ぶり続けていた肉悦が限界レベルへと到達し――。

「わ、わたしずっと、ああン！　し、慎一さんが好きでした！　見ず知らずの私をこの家に受け入れてくれた時から、ずっと私ッッしんいちさんがあぁぁぁぁぁ！」

憧れの人からの、このどストレートな告白に男のハートもドキドキマックス状態。

「俺も好きでした！　ずっと美紗緒さんのことが！　ずっとずっと！　ああっ！　も、もうイクッ！　イッちまうううっ！」
「わたしもですっ！　なにか腰の奥から来ます！　あぁっ！　あああぁぁぁっっ！」
美紗緒は絶叫すると共に、女豹姿のグラマーボディを息ませた。
淫らに宙を掻いていた両足の指が限界まで丸まり、ペニスを包む膣襞たちがビグビグビグビグっと尋常ではない痙攣をはじめる。
（イッてる！　美紗緒さんがイキまくってる！）
このまま共に果ててしまいたい。
首輪を嵌めたＲＥｏｎＡの肉食ボディに、思いっきり種付けしたい。
しかし、欠片ほど残っていた理性が、真の獣と化すことを引きとめた。
（でも、これは違う！　俺が抱いてるのはＲＥｏｎＡじゃない！）
目の前にいるのは妄想で何度も汚したセクシーグラビアアイドルではない。
ＲＥｏｎＡのコスプレをした、現実を生きる綾文美紗緒さん、だ。どれだけ熱烈な告白をされようと、無責任に中出しをするわけにはいかない。
奥歯を思いっきり噛み締めて、肉欲に堕ちきる寸前で男根を引き抜く。
そうして正常位の膝立ち姿勢のまま、愛液でヌルヌルになったペニスを掴んで前を見た。
そこには激しいセックスの果てに絶頂し、全身をヒクヒクさせているＲＥｏｎＡの艶姿。

何度も妄想でむしゃぶりついたビッグバストが大胆に下乳を見せて震えている。
しかし慎一の脳裏を今独占しているのは――。
「あぁぁぁあぁっ！　美紗緒さぁぁぁあぁぁん！」
お淑やかで家庭的な彼女にずっと募らせ続けた憧憬の思いが強烈な高揚感となり、熱い濁流となって剛直したペニスに一気に集約した。
ドギュン！　ドプドギュどぷドプドプン！
凄まじい勢いで弾き飛んだ第一弾は、ブラをしていても丸見えな下乳にビチャンと直撃。続けて二発同じところで白濁液がブバッとはぜ女豹が「あはン」と甘い声を漏らす。
最初の勢いが緩んでもザーメンの排出は止まらない。
とめどなく溢れ出る灼熱液が、薄くてしなやかなグラビアアイドルの腹の上にぶちまけられ、綺麗な縦割れヘソに白濁の池を作っていく。
何度も写真でオカズにした肉食ボディを、己の排泄液で白く染め抜いた。
頭の中身が全て溶け出すような恍惚感の中、慎一は陶然とその光景に見入っている。
「っくふぁ……っふぁぁぁ……」
そして男は全てを出し終えると、膝立ちの状態からがっくりと上半身を前に倒す。
左手を床につきハアハアと肩で息をしながら、官能の余韻にどっぷりと浸っている美紗緒と視線を交わした。

二人はどちらともなく瞳を閉じ、ゆっくりと唇を重ねあう。
それは的を外さないように目を開いたまましたぎこちないファーストキスとも、行為中の興奮をより高ぶらせるための貪るようなディープキスとも違う。
身体を一つにした男女による、お互いの気持ちを確かめあうような優しい口づけだ。
しかし慎一はまだ若い。しかも相手は肉食ボディのセクシーグラビアアイドル。
余韻を味わうキスだけでも、イッたばかりの男根がビクンと力を取り戻す――のだが。
「うふふっ。今した素敵な経験を、さっそく次の投稿作に生かさなくっちゃ」
あんな思いをしたばかりだというのに、彼女は再び小説家になる夢を復活させていた。
自ら身体を起こすと手コキ取材の時と同じように、熱心にメモを取りはじめる。
慎一としてはこれほど嬉しいことはない。
（んだけどさぁ……。ソレはソレ。コレはコレだよなぁ……）
股間の分身は猛りを収めず、ＲＥｏｎＡ姿のまま豹柄巨乳をプルプル揺らしてメモを取るグラビアアイドルの姿に、はしたないほど勃起していた。
無論、夢に燃える美紗緒に、もう一回ヤリませんかとは口にできない。
（この後、久々に……『ＲＥｏｎＡ』をオカズにしちゃおうかな……）
元気を取り戻した美紗緒の姿に心の底から喜びながらも、たははっ、と苦笑するしかない慎一だった。

第五章　アンタのことなんて大っ嫌い！

（お、俺みたいなフツーの奴が……）
誰でも名前を知っているような、トップアイドルのバージンを奪ったのだ。
剥き身の性器を直接混じりあわせている肉体的な快感だけではなく、そんな男としての凄まじい優越感が胸の奥から湧き出てくる。
「だ、大丈夫か？」
しかし、自分が今こうして抱いているのは清純派アイドル『小春風りの』ではない。
「あ、当たり前よ……っんっ……構わず続けて……いいわよ」
毒舌アイドルとして芸能界の『天下』を狙う、獅子堂璃乃だ。
処女喪失直後でも強がり、気丈に振る舞うその姿はさすがと言うしかない。
（でもコイツ……今、どんな顔してんだろ……）
どうしても、前を向いている強気アイドルの表情が見てみたくなった。
しかし「お前の顔が見たい」と言っても絶対に振り向かないだろう。
男は身体を後ろから覆いかぶせるようにして、彼女の耳元に口を寄せる。
「……璃乃。俺、お前とキスがしたい」
直後、身体を繋げている女体がそれだけで、感電でもしたようにビクンと鋭く痙攣した。
「な、なな、なにを……突然……」
「ダメか？」

「……そ、そんなことはないけど……」
後ろから丸見えな、眩しいほど白いうなじが急激に濃い赤色へと茹だっていく。
慎一はもう我慢できなくなって片手を伸ばし、相手の細い顎を掴みこちらに向かせた。
「……ッッ！」
璃乃の表情に息を飲む。自分の前では常に強気一辺倒だった美少女が、凛々しい眉をへニャンと垂らし、瞳の端には大粒の涙を溜めていた。
（か、かわええ……）
テレビの中の清純派アイドル『小春風りの』の清楚な可愛らしさが演技なら、目の前のこの顔は、正真正銘、素の彼女の可愛らしさだ。
たまらず首を伸ばしてキスをした。慎一は唇を重ねると、それと同時に舌を差し込む。
「ンんっ……んっ……ッッ～～っっ！」
後頭部が痺れるようなディープキスの快感を、ナマイキな幼馴染みに味わわせる。
なにしろ唯一の性経験で、破瓜したばかりの相手をコレで落ち着かせた実績がある。
加えて慎一は純粋に、このカワイイ年下の幼馴染みと口腔粘膜でも思いっきり交わりあいたかった。対して璃乃は、当初両目を大きく見開いたが、がむしゃらに舌を絡め続けているとその瞳はすぐにトロンと閉じられた。
どこもかしこも敏感体質な清純派アイドルは、キスの弱さも予想以上。

「んははぁン……こ、こんらのぉ――ンちゅっ……ああンっ……んンンンっ」
密着させた口腔内で瞬く間に、鼻にかかったような甘い喘ぎ声を漏らし出す。
熱烈で濃密なディープキスにより、破瓜の痛みはすぐにトロけてしまったようだ。
(コイツ……エッチしてる時だけはマジでカワイイっつーか、しおらしいな)
これで本格的にセックスをはじめたら、どんな反応を見せるのだろうか？
想像しただけで、鼻息が荒くなる。
慎一は顎を掴んで強引に後ろを向けさせていた美貌を解放し、前に倒していた上半身を起こして背筋を伸ばした。そして改めて彼女のくびれたウエストを両手で掴み、まずは極力ゆっくりと腰を動かしはじめる。
(すげーキツキツなのに、奥までヌルヌルのトロトロで――た、たまんねえ)
ペニスの先端から根元まで、それこそ竿肌に浮く血管の溝に至るまでもが膣襞たちと密着し、しっくりと蕩けあうような一体感である。そんな中で肉棒を動かせば――。
「っあくふぁあッッ……」
眉間に突き抜けるような鮮烈な官能が迸り、情けないほど甘い吐息を漏らしてしまう。
「し、しんいちもぉ……っふぁ……き、気持ちいいんだねぇ、ふはぁあぁっん――」
甘く喘ぐ璃乃にそれを揶揄されたわけでもないのに、慎一はカッと顔が熱くなった。
その恥ずかしさを誤魔化すため、口が勝手に相手を責める言葉を紡ぎ出す。

「……さ、さっきからオマエ、尻の穴がスゲーひくひくしてんぞ」
「なっ⁉　……ちょっ、へ、へんなところ見ないでよぉ」
四つん這いで尻を抱かれた幼馴染みが恥ずかしそうに身をよじる。
しかし、細いウエストを両手でがっちりと押さえつけられているため、尻の谷間をこちらの視線から逃がすことはできない。
「んなこと言ってもオマエがこの前、自分で自分のことをもっとエロい目で見ろって言ってたじゃねえか。ほら、また今ヒクッてしたぞ」
「……ッッ⁉」
「だから、ずっとガン見してやる。マ〇コの奥をズンッってされるとキュッキュッって窄まるエロいケツの穴を、エロエロな視線でずぅ～～っとガン見しててやる」
意地悪なセリフをやめられなかったのにはもう一つ大きな理由がある。璃乃がこちらの一言一言に対して敏感に反応し、ビクビクと女体をビクつかせ続けていたからだ。
（こ、こいつ……性格は明らかにSの癖して、体質は実はMなのか？）
美紗緒とは違った意味で、璃乃もかなりエロい身体をしていた。
こんな反応をされては、腰の動きが止まらなくなる。
男の下腹に打たれる小尻が、たむん、たむん、と小気味よく弾み出す。そして慎一の言葉通り、動きに合わせて谷間の小穴もキュッキュッとレスポンスよく皺を深める。

「あはアンっっ……ああンっ……ッッんはあぁン！」
加えてこの喘ぎ声の可愛らしさはなんなのだ。僅かに鼻にかかったような、恥じらいを含む甘い艶声が、リビングルームに充満していく。
（それにこの尻、ものスゲー抱き心地！）
璃乃の身体はよく引き締まっていて見た目はスレンダーな癖に、全身の筋肉が健康的によく発達している。やはりこれも舞台などの長年のタレント業の効果だろう。
だからこそ下腹が打つ牝尻の柔らかなまろみに加え、その際の女体自体の反発力が凄まじい。こちらの獣欲を全て受け止め、それを丸ごと肉悦に変えてフィードバックしてくるような素晴らしすぎる抱き心地に――。
パンパンパンパンパパパパパン！
瞬く間に尻を打つスピードが上がっていく。
「アンあんあんアンあああああンっ！」
それに合わせて、喘ぎ声も比例して上擦っていき、ますます男の動きを速めさせる。
「気持ちいいか？　俺とのセックス気持ちいいか？」
「う、うん！　き、気持ちいい！　慎一のが凄く気持ちいい！　すごく感じちゃうっ！」
てっきりまた、強がったセリフが返ってくると思っていた。
その際にはまた意地悪なセリフで言葉責めして、敏感M体質なスレンダーボディをビク

ビクさせてやろうと思っていた。しかし――。
「ああン！　す、すごいよおぉ……し、慎一のが、あああン！　アタシのお腹の中を掻き回してるみたいで、っンはああっ！　もっと、もっともっとお尻を突いてえぇっ！」
璃乃の言動から完全に、いつものトゲが消えている。
（デ、デレた⁉）
普段のツンな言動とのあまりのギャップに、慎一の鼻息がさらに荒くなる。
再びどうしても生意気アイドルの顔が見たくなり、今度もやはり背中に覆いかぶさった。
「お、おい。こっち向け」
璃乃は普段の強情さが嘘のように、言われるまま後ろをスッと振り向く。
（うわっ⁉）
慎一の突入に合わせて細い顎をガクガクと躍らせながら、切れ長の瞳は官能で潤みきり、たまらなく切なそうな視線でこちらを見詰めてくる。そして普段、憎まれ口しか叩かない桜色の唇は、今はハアハアと控え目に息を乱していた。
（今のコイツの可愛さは反則だ！）
男がただただその愉悦一色に染まった美貌に見入っていると――。
「ああン！　も、もうアタシ……んはああっ！　慎一ぃ、しんいちぃぃぃっ！」
むちゅうッッ――と璃乃の方からキスをしてきた。

窮屈な姿勢にもかかわらず精一杯首を伸ばし、自ら舌まで深く入れてくる。うっとりと瞳を閉じながら夢中で舌を絡め、口蓋から歯茎までもねぶり回してくる。
それはまるで大好きなご主人さまの顔を舐める、小犬のような情熱的な舌使い。
一舐めごとに『アタシ、あなたが大好きです』と告白されているようだ。
ゾクゾクゾクゾクゾクっ！
そのいじらしすぎる熱烈なキスに、背筋に凄まじい官能の震えが走る。
直後、左手で思いっきりトップアイドルの肩を掴み、がむしゃらに舌を絡めあった。
そして右手は女体の前に回し、後ろから弾むバストを思いっきりワシ掴みにする。
唇で、舌で、乳で、尻で、そして女性器で――トップアイドルの全身で味わう肉悦と、ツンな幼馴染みが見せるデレデレな可愛らしさに、男の性的興奮はマックス状態。
牝尻と下腹がパンパンとぶつかる間隔がみるみる狭くなっていく。
腰の奥で強烈な官能の高ぶりが発生し、瞬く間に引き返せない領域に到達した。
「い、いきそうっ！　もう、い、いくっ！」
璃乃の唾液でドロドロになった舌でそう叫ぶ。
「い、いいよっ！　アタシもイキそうなの！　このままアタシの一番深いところを慎一でいっぱいいっぱい思いっきり突きまくり続けて！」
窮屈な姿勢で後ろを向いていた璃乃も、こちらの口元と淫らに練った唾液の糸を結んだ

まま、桜色の唇でそう叫ぶ。
二人は超至近距離で熱烈に見詰めあい、再びお互いの唇の形が歪むほど濃厚なディープキスをした後に顔を離した。
男はガバッと身体を起こし、改めてくびれた腰をガッチリと掴み激しい突入を開始する。
対して女は前を向き、両手両膝で床に踏ん張るような四つん這いでそれを受け入れる。
パンぱんぱんパンずぱぱぱぱぱン！
牡は他の動きを忘れてしまったように激しく、鋭く、小刻みに腰を振りまくる。
牝はその見事な赤髪を振り乱し、珠の汗を飛び散らせながら何度も顎を仰け反らせる。
「んはあぁぁあぁっ！　イイイッ！　奥まできてるぅっ！　とどいてるうぅぅぅっ！」
それはまさに獣の交尾。
肉欲の赴くまま牡牝の生殖器官を一つにする、最も原始的な体位での愛の交わりだった。
慎一の全身に愉悦の紫電が猛烈な勢いでビリビリと駆け巡り、指先から脳みその皺の溝に至るまで、肉悦の火花がバチバチと弾けまくる。
璃乃の反応はさらに凄まじい。
スレンダーな背中を形作る薄く小さな筋肉群がビクビクと個別に痙攣し、彼女の全身を駆け巡る肉悦の稲妻の迸りっぷりが目に見えるようだ。
加えて溢れる愛液でヌルヌルのグチョグチョになっている膣襞たちは、爆発寸前の剛直

を舐めるようにしゃぶり回し、噛み千切るように絞り上げてくる。
「イク！　いくううぅ！　りの！　りのおぉぉぉぉぉっ！」
このまま中に出すからな――そう叫べば彼女は二つ返事で同意するだろう。
しかし璃乃は芸能界で、やり残したことが山ほどある。
慎一は思いっきり深く腰を突き入れてから、欠片ほど残っていた理性を振り絞り、男根を幼馴染みの中から引き抜いた。
愛液まみれの肉棒を掴むと同時に、細い尿道の中を灼熱のザーメンが迸っていく。
ドギュんンッ！
白濁の初弾は、セックス中に言葉責めした薄桃色の皺穴にビチャッと直撃。
「はうん！」
前を向くトップアイドルは鋭く喘ぎ、その一撃で両手が肘からガクンと崩れ、尻だけを高く掲げた姿勢で上半身を床に落とす。
ビチュビチャビチャっ！
続けざまに迸る精液が、璃乃のアナルから尻の丸み、踏ん張る太腿に至るまでを白濁色に染めていく。それに合わせてスレンダーな敏感ボディが小刻みに鋭く痙攣し、とりわけ小尻の尻エクボがビクンビクンと跳ねるように震え続けた。
「くはあぁ……っっ……っくふぁあぁ……」

第七章　二人の夢

ぐじゅン、ヌチュぐちゅ、くじゅン、ぐチュぐちゅッ――ぐズじゅン！

∞の字を様々な大きさで何度も書いては、力強くIを一筆書き。

彼女の弱点を意識して重点的に責めていると、必然的に長いストロークでねちっこく腰を使うことになる。

「ああっん！　らめええっ！　そんらにズンズンもうらめええっええぇっ！」

全身のビクつき方も半端ではなく、まるでその一突きごとに絶頂を繰り返しているようだ。白のハイヒールを履いた両足の甲が限界まで反り続けている。

「んちゅん……璃乃さんっ――んちゅ……ンれろんんっちゅン」

しかもその間、上半身は美紗緒が男の腰つきに負けないほどねちっこく責め続けていた。

「ああっ。こ、こんらぁ……アタシだけ気持ちいいのはやらよぉ……みんなれ、しんいちもぉ……みさぉしゃんもぉ……き、きもちよくなってぇ……」

自分が気持ちよくないということなどありえない。しなやかな膣襞に生でペニスを絞られて、ビクつき続けている女体とのセックスは十二分に気持ちいい。

（ま、まーでも、璃乃ほどじゃねーかもな……）

ただ、愛撫だけしている美紗緒は事情が違うだろう。

とその時、ハッとして幼馴染みのセリフの意図を察した。

顔を前に向けると、官能の涙に濡れた生意気アイドルの瞳がこちらを見詰めていた。

そして栗毛の美女にチラリと視線を向けてから、小さくコクッと顎を引いてくる。
「み、美紗緒さんも一緒に……」
慎一は璃乃と繋がったまま、彼女の上で上半身を満遍なく愛撫しているお姉さんのスカートを大きく捲った。
「きゃっ⁉　えっ、あの……慎一さん？」
慌ててスカートを直そうとした元グラビアアイドルに、それまで責められ続けていたトップアイドルが下から両手を絡みつかせる。
そうして驚いている年上の元後輩をグッと引き寄せ、ハアハアと愉悦の吐息を漏らす桜色の唇が言葉を紡ぐ。
「さ、さんりんれぇひとつになろ？　ねっ、みさおちゃん」
「り、璃乃さん、でも今夜は――んぐっ⁉」
身体は上下のまま攻守を変えて、今度は璃乃から美紗緒にキス。
直後、男の目の前で白いパンティに包まれた女の丸みがビクンと敏感に跳ね上がる。
改めて慎一が下着に手をかけてズリ下ろしても、彼女は抵抗しなかった。
（ス、スゲー）
そうして現れたのは、引き締まった太腿に支えられた元女豹の双丘。
むっちりと盛り上がった牝肉の丸みは、ただ四つん這いになっているだけで男を誘って

いるようだ。それでいて深みのある谷間の中心では、やや赤みの強い皺深い小穴がくぱぁくぱぁと息をひそめるようにして開閉している。
（ほ、本物だぁ……本物のＲＥｏｎＡだぁ）
今さら慎一がそう思ったのは左のお尻の下に、グラビアと同じく黒子が二つ並んでいるのを発見したためである。
そのままじっくり舐めるような視線を下に向けると――。
「うわぁ……もうトロットロになってる……」
すでに満開の牝花からは蜜液が滴り、太腿まで濡らしていた。
しかも以前はビキニラインに沿って処理されていた栗色の茂みが、グラビアアイドルを引退したためか、今では本来の自然な形に戻っている。
無論、初体験時のような段差もない。
「美紗緒さんともヤッちゃいますよ！　バックからしちゃいますからね！」
「そ、そうらよぉ！　みさおちゃんともヤッちゃって！　三人れひとつになるろぉぉ！」
璃乃の叫びにも後押しされ、慎一はズルンとペニスを抜くと、すぐにその上に重ねられた満開状態の牝華を貫いた。
「ああっ、そんないきなり――ンっ、くふあぁあぁぁっ！」
栗毛のウェーブヘアが宙に舞うほど、四つん這いの元女豹が大きく仰け反る。

（くわぁ……。美紗緒さんってば相変わらず、奥までヌルヌルのトロトロだぁ）
膣襞たちの貪婪なまでのしなやかさも変わりはない。
突き入れた直後から、無数の膣襞たちが中の肉棒を舐めるように絡みついてくる。
たまらず男はすぐに獣の動きを開始した。
「し、慎一さんが――っふぁっ！　う、後ろからっ、ああっ！　っくふぁっ！」
四つん這いの元女豹のヒップは、その桁外れた巨乳と違い大きさ自体は人並サイズ。
それでいて男の欲情を誘わずにはいられない、肉感的な独特の厚みを帯びている。
だからこそ――パンパンパンパンパンパン！
若々しく引き締まった臀部の筋肉群に、何度も牝脂を重ね塗りして仕上げたような、その特上の丸みを己の下腹で思いっきり弾ませた。
ヴァギナを貫いた直後から、フルスロットルで腰を突きまくる。
「美紗緒さんのお尻、タプタプのブルンブルンでめっちゃエロいですぅっ！」
男の視線は桃色に色づいたヒップの揺れと、ヴァギナを貫いて以降お尻の中心でキュッキュッと窄まりっぱなしのアナルに釘付けだ。
「そんなに激しくお尻をパンパン鳴らされると、っふぁっ！　は、はずかしいですぅ！」
「璃乃！　お前も休んでる暇はねえぞ、今すぐお前の中に戻るからな――おりゃぁ！」
「んあっ！　ズンってキタあぁっ！　しんいちがおくまでズンズンきたよおおっ！」

元『女豹のＲＥｏｎＡ』とバックでがむしゃらに交尾し、元『清純派アイドル・小春風りの』と激しくもねちっこい正常位セックスを楽しむ。
璃乃を散々よがり泣かせてから、美紗緒の尻を思うさま下腹でパンパンと弾ませる。
慎一のペニスはズルンと蜜華から抜き出されると、滴る愛液が糸を引いて落ちる前に、次の蜜華へと根元まで一気に埋め込まれる。
それを交互に何度も繰り返し、二大アイドルの嬌声を大ホールに響かせ続けた。
（お、俺なんかがこの二人を相手に３Ｐ……こ、こんなシチュ信じられねえよ！）
下にはステージ衣装を着たままの国民的人気アイドル。
上には大ヒット写真集のモデルであるセクシーグラビアアイドル。
そんな二人を舞台のど真ん中で交互に貫く３Ｐセックスに、腰の動きが止まらない。
己の下腹に打たれ小気味よい音を鳴らして揺れる肉感的な牝尻の横では、幼馴染みの美脚が形のよい脹脛をびくつかせて、二本とも淫らに宙を掻いていた。
何度も激しく足の甲を反り返すため、とうとう左脚のハイヒールが脱げてしまう。
トップアイドルの足先では、綺麗に並んだ五枚の爪が限界まで丸め込まれていた。が。
「はくっ！　ッッ～～っっ――はくううぅっ！」
自分の男根を勢いよく最深部まで突き入れると、一気にブバァと開く。
五本の指がでたらめな角度で折れ曲がり、一本一本が個別にビクビクと激しく震え出す。

「ああっ、璃乃さんがイキ続けてるのがビクビクって伝わってきますぅ――んはあっ！」
再び女豹の尻を抱くと、まるでミディアムレアに焼き立ての最高級霜降りステーキのように、トロットロに蕩けた牝肉がペニスにねっちりと絡みついてくる。
たとえＲＥｏｎＡを引退しても、肉食ボディは相変わらずだ。
（美紗緒さんの身体って、マジでチョーエロすぎる！）
それは見た目や女体の感触だけではない。
肉感的な牝尻がクイックイッと本能的に蠢いて、突き込むペニスに己の感じるポイントを積極的に合わせてくるのだ。
それはまさに発情した牝獣の動きそのもの。しかも――。
「いいっ！　いいぃっ！　あはオおぉおぉぉぉ！　ンはあおぉおぉおぉぉぉ！」
四つん這いの姿勢で栗毛のウェーブヘアを振り乱し、子宮から絞り出すような喘ぎ声を迸らせはじめた。
（たまんねえよ！　どっちとハメてもたまんねええっ！）
絶頂のしすぎで一刺しごとにキュンキュンと引き絞ってくる敏感マ〇コと、腹を空かせた牝豹のごとく中のペニスを激しく舐めしゃぶってくる肉食ヴァギナ。
数度ズンズンと腰を突いては、アイドルからアイドルへとペニスを挿し替えていく。
しかも相手は、そんじょそこらのアイドルではない。

清純派アイドルとグラビアアイドルとして、どちらも一時トップを取った二人である。
そんな二人を上下に並べての、贅沢極まりない３Ｐセックスに男の興奮も最高潮だ。
「ああっ！　璃乃っりのおぉぉっ！　美紗緒さんっ！　みさおさあぁぁぁぁぁぁん！」
すると、あまりの興奮に的を外した肉先が、ズルンと二人の股間の間に嵌まり込んだ。
『はくうぅうんっ！』
直後、三人同時に新たな愉悦の声を上げる。
「ああっ、そ、そこ、ビンビンくるっ！　ビンビンっきちゃいますううぅうううぅっ！」
中でも一番反応が激しかったのは四つん這いの栗毛美女。
上反る肉棒にクリトリスを直接ゴリゴリと擦られて、あられもなく喘ぎながら、突かれる尻をアナルごと激しくビクつかせている。
「くわあぁっ！　み、美紗緒さんまでそんなにビクビクされると俺えぇぇっ！」
特上の女体にギュッと上下を挟まれて、慎一はたまらず絶叫し腰の動きを加速させた。
「ああんっ！　そんなにスピードアップされると、アタシもゴリゴリすごくかんじちゃうよおおぉぉっ！　いっしょにィィっ！　みさおちゃんといっしょにィィィィっ！」
対して下の璃乃は、親友の名を叫びながら彼女に強くしがみつく。
二人は激しく喘ぎながら見詰めあうと、どちらからともなくお互いの髪を掻き乱すようにして頭を抱きあい、再び貪るようなディープキスをしはじめた。

グチュグチュと下品なほど粘っこい口腔粘膜を絡ませあう音が聞こえてくると、上下の女体に小刻みな肉悦の痙攣が走り出す。そのため二人の股間に挟まれたペニスの芯まで、愉悦のバイブレーションがビンビンと強烈に響いてくる。

「もうイクっ！　もういきそう！」

たまらず慎一は仰け反った。

腰の奥でもう引き返せない官能の昂ぶりが発生している。

しかし今夜だけは、どこでフィニッシュするか迷いはない。

「璃乃！　お前の中でイクからな！　思いっきりお前の中でイッちゃうからなあぁぁ！」

「ああん！　いいよ！　こんやはアタシのなかでぇぇおもいっきりぶちまけて！　アタシをしんいちでいっぱいにしてえぇぇぇぇぇぇ！」

同意を叫ぶ幼馴染みの絶叫を聞き、男の腰の動きも激しく小刻みになっていく。

その射精直前の痙攣するような突入で股間を擦られて、最も先に限界に達したのは――。

「あああっ、イッ、イッちゃいますっ！　わたしっ、イッちゃいますううっ！」

美紗緒だった。

なにしろ慎一のペニスは爆発直前で、硬さも熱さもマックス状態。

それで特別敏感なクリトリスを、肉傘から竿肌にかけての凹凸でズリズリズリと激しく擦られ続けているのだ。

肉感的な女豹のヒップがぶるりと震え、中心の小穴がきゅぅぅっと窄まったその直後、ぶしゃあああぁぁぁあああぁぁぁ！

潮吹き癖のついてしまったグラマーボディが絶頂を極め、その飛沫が股間に挟まる爆発寸前のペニスにゼロ距離から直撃した。

「あッッ⁉　んはあぁぁっ！　イクっ！　イクぞっ！　ッッッ――」

そのダイレクトすぎる熱さに慎一は奥歯を噛み、ズルリと二人の間から男根を抜く。

美紗緒の絶頂液にまみれたホカホカの肉棒を、その真下にあるトップアイドルの蜜壺に凄まじいスピードで一気にブチ込んだ。

「ンはあぁぁッッ！　しんいちのがおくまでズンってきたよおおぉぉぉぉぉっっ！」

そのまま遮二無二腰を躍らせて、ものの数秒で全身を息ませる。

「璃乃っ！　りのおおぉぉおおぉぉぉっ！」

爆発寸前の肉先を幼馴染みの子宮孔にぐぷりと埋め込み、なんの隔たりもない牡牝の性器が直結したその直後――。

どぎゅドリュどぷドピュどぷどりゅドプどぷどぷンっ！

アイドル二人相手のセックスで限界まで練り上げられたザーメンが、凄まじい量と勢いで、とめどなく幼馴染みの中に迸っていく。

それは子宮を責められるのが特に弱い超敏感体質な璃乃にとって、連続絶頂のスタート

を意味していた。
「あああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあぁぁぁ！」
広いコンサートホールが、トップアイドルのエクスタシーの絶叫で満たされた。
そして、まるで彼女が慎一の身体の一部にでもなったように、男根の脈動に合わせてビクビクビクと全身を震わせ続けたその果てに――。
ぶしゃあああぁぁあああぁぁぁあぁぁぁっ！
璃乃までも潮を噴き出した。
密着していた男女三人の股間を熱く鋭い激流が満たし、三人の絶頂感をさらに深める。
「あっ……ああっ…………ふにゃぁ～」
最初にエクスタシーの息みから解放されたのは最年長のお姉さんだった。限界まで反り返らせていた顎をブルルッと震わせて、ドサッと璃乃の上に倒れ込む。
「くっ……くはぁぁ……」
それを合図にしたように、慎一も無意識に止めていた呼吸を再開し、ぺたっ、と舞台に尻もちをついた。
そのまま三人で身体を寄せあい、長い時間まったりと絶頂の余韻に浸っていると――。
チャラ～♪　チャララ～～ラララ～♪
美紗緒のハンドバッグの中から、ケータイの着信音が聞こえてきた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

魔海少女ルルイエ・ルル2

【小説：羽沢向／挿絵：ピエール☆よしお】

全国書店で 好評 発売中

クトゥルフの娘たちが学園祭でメイドさんに変身!?

ルルたちに新たな邪神が這い寄る!

女幹部メル様のセカイ征服計画！

【小説：高岡智空／挿絵：鈴眼依縫】

全国書店で 好評 発売中

少年（カノジョ）に封じられた魔神降臨（とき）の刻!

玲音と冬馬・交差する2人の物語、衝撃（クライマックス）の最終章へ!

思春期なアダム3 ―人泣きの子猫

【小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃】

全国書店で 好評 発売中

お腹の子供のパパを探してます!!

ポテ腹魔法少女が父親探しにひたすらH!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獣学園戦姫ノブナガ! ①〜③
- BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
- 不死の吸血鬼がFSのご主人様を募集しているようです
- 現春期なアダム ①〜③
- 呪詛暗らい師【カースイーター】
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!
- 借金お嬢クリス ①〜③
- 無敵の姫騎士がMMCに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!